

「家父長」あるいは「恋愛結婚」という困難： 小島信夫「裁判」をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 武蔵野大学文学部日本文学研究所 公開日: 2025-06-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 足田, 雅昭 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2000660

「家父長」あるいは「恋愛結婚」という困難

——小島信夫「裁判」をめぐって

正田 雅昭

0

小島信夫の初期の長篇小説に「裁判」(『文藝』一九五六年一〇—十二月、同年十二月に河出書房から単行本として刊行)

というテキストがある。これは、「島」(『群像』一九五五年八月—十二月)から、ちょうど一年後、第二の長篇となったものだ。

小島はのちの単行本の自己解説の中で、小説家K氏の作品の剽窃を疑われた経緯を述べているが、小島はK氏のものとは比べても、肝心な部分でこの作品を評価していないようである。特に人物造形の浅さが、「作品全般を平坦」にしてしまつて、この部分を充実させるために長篇を試みたが、結局その探究は「抱擁家族」に繋がつていったという。また、これを「諷刺」という面から考えても、十分な成果を得られなかつたと述べていることは、周囲の評判をよそに自己評価の高い「島」とは大きくことなる点である。

確かに「諷刺」や「政治」「社会」といった面からみると、

このテキストは、「島」ほどの強度を持ち得ていないと言える。しかし、「島」とともに考えてみると、小島の文体の重要な面(ユーモア性)はどちらにも十分見いだせるし、むしろ「裁判」の方が、「家族」「性愛」などといったのちに前景化されるテーマを直接的に扱っている。

さらには、この確固たる主体性(判断主体としての強度)を感じられない曖昧な視点人物からは、後の「馬」や「抱擁家族」以後の家族小説にも繋がるような面があることは見逃せない。そして、何よりも重要なのは、この小説の男たちの多くが、夫婦間トラブルに悩まされていることだ。戦後の家族は、核家族化してゆくと同時にそれまでの強権的な家父長像が崩壊し、妻あるいは子供達と愛情の関係で結ばれていることを理想とする。経済的支柱であることは、家長の威厳よりはむしろ、家族への「愛情の証明」となる。以前に拙論で扱った「馬」とは、まさにこの問題に焦点化したテキストだ。

日本の企業経営理念には家族的比喩が重なることが多いことは、よく指摘されることだが、公的な家族と私的な家族は相互

補完的な関係にはならず、むしろ、私的公的両方の「家族」に居場所を失った「夫」の姿が、「サラリーマン」を中心とした多くの戦後表象にて描かれてきた。家庭に十分な収入を稼げない夫は「甲斐性なし」とされ、「甲斐性なし」であるが故に会社にも安定した地位を築くことが出来ない。こうした、新しい「家父長」の姿は、戦後急速に増えてゆくことになる。

本論は、「裁判」の精読から、そうした新しい「家族」制度に対する小島のまなざしの萌芽を読み取り、つかみ所のない不安定な文体の問題を考えてみようとするものである。

1 分裂する公的トボス あるいは 読む人

物語は「私」に焦点化された視点によって語られる。「私」は、常に周囲の人々からの「視線」を気にする人物である。

どうもこれはおかしい。やつぱり笑っているやつがいる。私とその部屋へ入った時、いつものように油をひいた床板がほんの僅かだがきしった。それと同時に部屋のざわめきが急に水がひくように静かになったように思われた。(253)

「私」はある出版社に三上を訪ねる。三上は不在だったが「私」は彼を待つことにした。会社の給仕の発言や後の状況解説から「私」の名は「野村」と言い、「役所」の役人であることが分かる。「私」(以後、「野村」と表記する)は妙に会社の人間たちの態

度が気になるがこれといって具体的に指摘すべき点があるわけではない。むしろ、その違和感は、野村自身の後ろめたさのよなものから発生しているようでもある。

役人などの公務員は、国家公務員法(一九四七年施行)や地方公務員法(一九五一年施行)によって一部の例外を除き副業(つまりはアルバイト等)が禁止されている。こうした背景には公務員の公平性(私企業からの隔離、営利企業への従事等の制限)や秘密保持といった事情があるものの、一般企業がこうした動きに同調してゆくようになるのは、高度経済成長にむけて終身雇用制が一般化してゆくことと密接な関係がある。つまり、生涯にわたって最初に勤めた企業で働くことが一つの「理想」とされる社会では、「職場を転々とする」とか「転職をくりかえす」ことに対して軽薄なイメージが付与されるようになるわけだ。その意味で「裁判」が刊行された一九五六年当時の公務員は、副業禁止のイメージが最も強かった。

野村が三上のもとにきた理由は「仕事」であるが、役所の勤務中に抜け出してきた野村にとって、それは紛れもなく「副業」である。そうした野村の意識が周囲への違和感を言わば被害妄想的に発生させているのである。

しばらくして、私はこの場のフニキになれてようやく、一通りゆつくりと部屋のたたずまいに目をうつしはじめた。そのうち私の目は黒板の上に止った。黒板の上には、社員の外出先が書いてある。三上はどういうものか、こ

ここに書いたことがあまりない上に、私はこの外出先きを見るのを好まない。私は正式に訪問を受けたことが一度もないし、また受けることも好ましくない。そこには知名の人の名がいくつか並んでいた。私は意外に三上の外出先きを発見したのだ。

三上の外出先きはちゃんと書いてある。しかも私の役所へ出かけたのだ。

(235)

三上と野村はすれ違っているわけだ。私的な外出であるかどうかの判定がしにくい出版社にとって、外出とは正しく申告つまりは黒板に明示)されてさえないれば、何の問題もない。むしろ、会社では(少なくとも黒板上では)三上の外出は「公的」な扱いとすら言える。だが、野村は違う。野村は、ある意味、法令違反を犯してここに来ていることになる。むろん、この意識も野村の言動に大きな影響を与えているのは、言うまでもない。三上が自分の職場(役所)に居る以上、自分が役所に居ることとは出来ない判断したのか、野村はそのまま訪問先の出版社で三上を待つことにした。その際に出会ったのが、五島という男だ。

「うたぐり深い人だね」

「どこへ出かけた? ああお役所か。峯山さんのところだろうな。またあの人の本を出すのか」

峯山というのは、年下だが私の役所の上役である。三上

が私の役所へ出かけたことを知った時、ことによったら私のところへ寄ったのではないかとも思ったが、私自身も三上が私のところへ寄るとは信じていなかった。ところが五島が、役所と聞いて直ぐ峯山の名を口にしたので、私は自分がその役所の人間であることを、五島に知られたくないと思い、彼の視線をさけた。

(237)

冒頭の場面で三上はなぜ役所へ出かけていたのか。さきの公務員法には当初から例外措置もあったが、その一つに「執筆業」があった。その意味で三上が役所へ峯山に会いにいったのだとしたら、それは本当に公的な「仕事」であることを疑うことは難しい。峯山とは三上の上司でもあることは後に分かる。

五島は三上を待つ間に、様々な人物に声を掛ける。社内のある老人との会話から、五島は薬品を売っていることがわかる。ここで五島が口にする「ルチン」や「アリナミン」は、前者が一九三〇年代に強い抗酸化作用をもつポリフェノールとして、後者は脚気への救世主として一九五一年に発見され、製品化された。特にアリナミンは、当初は米ぬかから抽出した粗悪品が多く、安価に質のいい糖衣錠剤が製品化されたのは一九五四(昭和二九)年のことである。また、この製品化にはニンニクのビタミン分解因子が体内で完全に還元されることの発見が寄与するところが大きい。戦後、ニンニクが滋養強壯のイメージを強くもたれることになるきっかけとなった。物語でニンニクの話が出て来ることはそのことと対応している。

また、彼の売る薬の多くが何か緊急の病気のためのものである以上に、健康増進を目的にしたものであったことも注目しやすい。のちに五島が語る「グロンサン」は、一九五一年に解毒及び肝機能改善薬として中外製薬が開発したものであるが、こうした日々の健康増進を薬によって補うというのは、表向きは戦後サラリーマン表象の「企業戦士」というイメージとともに語れることが多かったからだ。アリナミンの最初のCMは一九六四（昭和三九）年に三船敏郎が「のんでするか!」というフレーズで有名になったもので、ライバル製薬会社であった大塚製薬はリポビタンDを発売。王貞治を起用した「ファイトでいこう!」というキャッチコピーでこれに対抗した。以後の、強く戦う（働く）男達というイメージへの先便となった。ちなみに、「グロンサン」は、中外製薬の戦後の業績衰退危機を救ったまさに救世主であった。

一方でこうした薬には、表向きのそれとは別に、「夜の夫婦生活」への意識が存在していたことも重要だ。企業戦士としての夫には、父になること、妻や子供を支える「大黒柱」になることが求められているからだ。「愛情」の継続を前提とする「恋愛結婚」は、「愛情」の名のもとに、「性」と「労働」のため、夫の「健康」を「家族」の管理下においた。

五島が社に出入りしている理由はこの薬の（非公認）の営業と校正の仕事のためであった。五島が受けている仕事の量は、同じ三上から受けているにもかかわらず、野村とは比べものにならない量であった。

私は一回に一頁以上の仕事を当てがわれたことはない。私としては五島のようにまともに働いて、それ相応の報酬を得たいと思うが、私が最初この仕事を三上から与えられた時、

「今日はたった、これだけですか」

と反問すると、

「これだけです」

と答えた。ちよつとややこしい旧漢字旧活字体に統一するちよつとめんどろな仕事だが、何といつても一頁である。ティネイにくりかえしくりかえし見直しても三十分とかからなかった。私はあくる日それを持って行くと、

何時間もたつて帰ってきた三上は、

「いや、今日でなくともよかったですよ」

「それで次の仕事は」

というと、

「まだ出ていませんね。急がない仕事ですからゆっくりやって下さってけっこうです。部長からもそういう話でした」

と何げなく答えた。

(243)

「部長」とは企業組織での言い方（公務員は課長職まで）なので、恐らく出版社の三上の上司にあたる人物であろうが、一方で三上と野村の上司である峯山は繋がっている。その意味で

は、この校正の裏仕事は、役所の仕事と半ば地続きである。

この後の昼食時に、野村は、老人に注文していた天井をとられてしまうが、給仕の指摘によれば、実は野村はそもそも注文をしていないのだと言われる。人の会社で、それも秘密で役所を抜け出している会社でその社員とともに昼食を食べるというのも妙な習慣であるように思われるが、この天井のエピソードは別の形で後への伏線となる。むしろ、ここでは愛妻弁当を持ってきた五島から、この老人が妻や子供と二十年も別居しているという事実を聞いたことが重要である。五島は、葉をすすめる際に以下の様な売り文句をうたう。

「家庭不和のもとで、そうでない人は用心に服用されることをおすすめします。純粹のホルモン剤もお分けしますよ。しかしまあ、こっちの方はなるべくもう四、五年あとにとつておいた方がよいですな」

(247)

サラリーマンを支える健康増強剤とは、その収入によつて生きている戦後家族像(核家族的な家族)のイメージとともにあった。

五島は私が小芦で話すようにしているのに、わめき立てた。名刺によると五島の妻が生花の先生をしていることが分つた。五島はその人柄というものだけでなく、家庭的にも、私を羨望させた。

(248)

生花の師匠の妻と共働きで暮らす五島、二十年妻と別居している老人(ここで「坂井」という名であると分かる)、という二人の人物と野村は、この家族のイメージによつて象徴的に位置付けられていることがわかる。また、野村の中で、自身をも含むこの人々の様子が外部からの視線に晒されるとき、「養老院」という言葉がくり返されることにも注目すべきであろう。むろん、これとても、野村の自己意識の反映ではあるが、重要な反転である。

2 階層化する同窓生 あるいは 書く人

次に出版社に現れるのは、吉本という評論家である。時代的にも吉本隆明を彷彿させるこの人物は、物語では「人生評論家」とされており、また野村とは中学時代の友人である。この人物の著作の校正を担当しているのが五島であるようだ。

五島を適当に去なした後、社長と思しき人物と会話する吉本であったが、その会話から、ある締め切りのせまった仕事を断るために来社したことが分かる。この社長と野村は同郷の同窓生であるようだが、その詳細は不明である。評論家や物書きのような知識人たち、出版社の上層部、役所の役人などが同窓であることは、地方都市ではよく見られることだが、物語は具体的な地名をあげていないし、戦後すぐの物語刊行時であれば、中央部でも事情はさほど変わらなかったかもしれない。

「峯山氏はずいぶん活躍しているね」

とつぜん吉本は眩くようにいった。三上が私の役所へ出かけたのは、峯山に会いに行つたのだということを知っていた。おそらく吉本も、おしゃべりのあいだに黒板を見ていて、すぐそのことに気がついたのである

「あんなにかせいで、あの男は役所に奉公しているみたいで、うまくやっているな」

私はそういっただけで、

「峯山をよく知っているの」

だまつてしまつたが、吉本も急に言葉数が少なくなり、またチラッと私の方をふりかえると、

「ああ。家族の人は？」

「さあ、元氣といえ、元氣ですね」

(253)

出版社からの帰路、吉本と野村の会話からは、峯山が単なる役所の役人ではないことがわかれる。「活躍」という言い方は、執筆者が校正者にする言い方ではない。さきに、公務員の副業禁止規定の例外には出版業があることに触れたが、峯山は執筆者として三上や出版社と深い繋がりがあるのだろうか。

また、この会話で吉本は野村の家族について触れているが、後に二人は喫茶店で三上と出会つてしまう。この際の三上と吉本の会話から、吉本の家庭の不和を知ることになる。

「奥さんのことはどうなりましたか」

「私小説的材料だね。分りきつたことだが、困っているのは子供の問題さ。おかしなもんだな。こうなると愛情なんてものは、今までであると思つたのがまちがいなくらい、白けてしまうね。家内が別れる段取りを細かにやっているのを見てみると、まるで料理をしたり、着物の模様をえらんでいる時みたいに、よそよそしいね。しかしそれでいて、未練というヤツは、それとは全く別にひそんでいるんだな。今はそいつとの戦いと、それから子供に対する愛情を処理する訓練だが、三上くん、子供は今になるともうおそいね。全く母親の方に味方して僕が何かいたりしたりするだけ、かえつて僕がインチキをしていると思うようだね。そうなると心配は心配だが、愛情も消えるね。正直いつて一人の男と別れるような女は、いつたい次の男とうまく行くか、それも夫心として気がかりだね、その点きみなんか、独身で幸せだな。いつたいきみはここで何をしているの。これからいい人と会つところを、じやましたのじゃないの。社には峯山のところへ行つたと書きおいであつたじゃないか」

(255)

この話を吉本が「人生評論家」であることと合わせて考えると興味深い。プライベートの家族問題は文学的素材となり得るが、吉本は「小説家」ではなく「評論家」である。私小説を書く立場ではなく、誰かの私小説を評する立場である。また、「人

生評論」という言葉を小説家の比喩ではなく、そのままの意味で問えば、「人生評論家」の家庭内不和の問題は他者から見れば、恰好のネタ（スキヤンダル）となり、書く人間と書かれる人間の位置は容易に反転してしまうわけだ。

3 侵食する「副業」あるいは 侵食させる「家庭」

野村の本業は役人であるはずだが、彼の役所での仕事のうち、最も労力が割かれているのは、役所への戻り方である。

私はもともと、生ニンニクを使用し、なかなかぐあいがい
いと思っていたが、臭いが強くて、家中の者が、敵視す
るようになったので、便所は役所の水洗のを利用するよう
にしていたが、それでも人が近づかなくなったので、この
薬を用いることにしたのだ。それから私のデスクのある部
屋の廊下へ出た。いつも私は役所を私用で抜けでる時には、
出る時より帰る時にこれだけの手数をかけるのだ。出る時
にくらべて帰る時の苦痛は、どうしてもこんなめんどうな
ことを私にさせるのである。

(259)

本来出社時に摂るはずのニンニク増強剤を、役所に戻る際に
服用していることは、この妙な転倒を象徴した行為である。こ

の「再潜入」の途中で、野村は峯山に呼び止められ上司の部屋
で会話する。

「野村くん、きみはかまわんから大いに自分の仕事をや
るがいいですよ。僕だつてかまわんからやるさ」といつて
まわりを見渡し、机の上の原稿をふせた。「役所は食える
だけの月給を払っているわけじゃないし、それにきみだつ
て家族が多いのだからな」

(260)

峯山の机上あるものは「原稿」である。もちろん、峯山の「原稿」
であるかは定かではないし、野村の知る由もないだろう。いず
れにせよ、峯山はその「稼いでいる」金をめぐって、やはり大
きな家庭トラブルを抱えている。

「いや、僕んとかなんかヒドイな。財産がなくなつても
養子というのはあくまで何か得をしていると思つてゐるか
らな。僕んとかなんか、今の財産は、僅かなものだが、み
んな僕のあくせくかせいだものなんだけど、前からあつた
みたいに思つてゐるんだ。もつとも戦争でなくなつたんだ
けれども、その戦争まで僕がおっぱじめたぐらいに錯覚し
ているありさまでね。女房というものは、亭主より義母に
忠実なんだから呆れるね。僕は夜帰ると、さかんに抵抗を
試みることにしているが、どうも時間的にこっちは不利で
すね。(以下略)」

(260)

目下、峯山は庭に離れをつくりそこで生活しているという。このように、多少の事情の違いこそあれ、野村の周りの人物はわずかな例外を除き、不貞行為による家庭内不和の問題を抱えているわけだ。

こう読んでくると、以下の峯山の言葉は、野村を思つてのものに思われてくる。

ああ、そうそう。それからきみ、仕事は三上に持つてこさせたり、持つて行かせたりしたらいいじゃないかな。きみが動くひまに別な仕事が出来て能率的なんじゃないかな。こんどから出来上つたら僕のこちらの机の抽出にでも入れておけば、三上が持つて行くよ。そうしたまえ。僕も三上にはそう伝えておくことにするからね。きみ、ああ、そうだこれだ。この仕事頼むよ。南に任せ給え。きみは自分でしなくていいよ。南にやらせればいいんだ」 (262)

ところが、この峯山の発言は、結果野村の南への憎悪の感情を強めてしまう。たとえ峯山の発言が副業に専念させるためであつたとしても、野村は十分な副業を得られてはいないし、そのことは本業である役所においても変わらない。

吉本や五島が存在が出版社における野村の存在価値を奪うのであれば、南の存在も同様に役所における存在価値を奪つてしまふのである。

私は何も書かずに出版社へ出かけたのだつた。それが私の筆蹟とはまるでちがう女の文字で、ちゃんと私の実際に行つた外出先が見えている。十五、六人の若い男女たちはまだ笑つていた。南が何か面白いことをいつづけているらしい。南が一言いうたびにみんなが喜ぶのだ。南は元氣ものである。彼らは私のことは念頭にないように笑っているのか、実は念頭においてそうしているのか見当がつかないが、この文字は誰からきいて、どういう意味で書いたのだろう。正にこの文字の通りなのだが、私に対して何らかの意図があると見なければならぬ。三上は一度もこの部屋へ来たことはない。

(263)

黒板に書かれた「外出先の表記」は、野村が実際に訪れていた出版社であつた。野村は秘密の私用で抜け出していたが、自らが書いたわけでもない黒板の文字は、野村の行動を正式な「仕事」にしてしまつてゐる。黒板の外出先の表記が役所と出版社で対になっているのと同様に、出版社における五島と同様に南は周囲を笑わせ、職場で生き活きと「労働」している。

こうみると、野村の位置は、本人の自覚とは無関係に、坂井老人に重なつてゐるのだと読者は気がつく。野村は、出版社という外部で言葉を正しく校正しているように見えながら、役所という内部では、黒板の言葉によって、その仕事の正当性が構成されているのである。

野村は出版社において、自らを吉本や五島と比べその境遇を嘆いていたように、今度は役所において峯山や南と比較し、その境遇を悲しむ。だが、そもそもここに出てくる男たちの共通点は、妻（家族）のために過剰労働（副業）を余儀なくされていることである。おそらく、そこから自由なのは、独身である三上だけであるはずだが、南に対しては、うらやむべき別の事情が付け加えられている。

しかし私はいつも心にとめていながら大事なことを忘れていたことに気がついた。南の妻が、南はこの職にありつくまで、どんなに僅かな不定収入しかない時でも、必ずその収入の範囲内で子供を養いながらやってのけてきた女である。どうしたってかないつこはない。何という羨むべき女房だろう。

(264)

「労働」する男たちの中で、南は数少ない家庭問題を抱えていない者の一人である。南以外で役所の中でこうした立場にいるのは、自分の収入が家族にわたることもなく、かといって酒や交遊費に消えてしまうわけでもない。役所のない人間に金を貸してまでいる老守衛だけである。この老守衛は構造的に俯瞰すれば、出版社の坂井老人と対照的な位置になるが、南と老守衛の両者は特権的な位置にいるという意味では、ある意味同じようなポジションにいるとも言える。

4 守られる家庭 あるいは 守るための仕事

峯山についてももう一つ触れておかねばならないことに、役所内のイベントの際に気前よく支払いを引き受ける姿である。

彼と出版社との関係は、まるでこの役所が出版社にかわってしまった観があるほどで、役所の用事でくる人より、彼の内職のことで訪ねてくる人の方が、どれほど多いか分りやしない。その代り彼は何か役所の会があれば、相当額をばいと投げ出すし、若い者のピクニックがあると、酒代や飲物の金を出すのは、もうほとんど定りのようになっていて、峯課長のところで私の下役の南などが予定を提出するのは、主にその目的のためなのである。その予定表は私のところへまわってくるが、モチロン私は金を出したことは一度もない。

(259)

こうした峯山の行為を自らの不正を隠すための偽善ととらえる野村は、こうしたイベント等は一切お金を支払うことはない。だが、この行為は、峯山が役所の管理職であることから考えれば、福利厚生を意識に基づいていることが分かる。

アメリカの指導下にあった戦後で、労働者の生活の向上が結果的に企業利益に繋がるという考え方が企業側に、労働を通じて会社や社会を豊かにしてゆくことに対する当然の報酬と

いう意識が労働者側に広がってゆくことになる。福利厚生には、「法定福利厚生（社会保険料等の企業負担）」と「非法定福利厚生（企業内福祉）」の二種類がある。前者は労働基準法などの整備とともに普及してゆくものだが、後者は社会的な意識の広がりが後押しするものであり、日本では公務員から大企業へとという形で広がっていった。

日本の企業は家族（的）経営主義という解釈がなされることがあるように、社宅、年金、退職金、慶弔費などの補助を企業がおこなっていることが多い。それは、主として男子正規社員を中心とした制度であったが、裏を返せば男子社員を中心とした家族（戦後の核家族）に対するものであった。会社が一つの大きな家族であるならば、その社員それぞれにも家族がある。それらは、互いに写像としての関係を構築し企業の発展と個々の人生を支え合う。

さらに、戦後の学歴社会の確立によって長期雇用と年功序列が労働者の企業評価の重要な基準となり、社員の私生活（家族との生活）を会社が保証するような関係が出来上がった。こうした経緯が、形骸的に開催される歓送迎会や忘年会等の飲食行事となつて、労働者の負担になつていくことが現在では批判の対象となつているが、テキストの現在では、こうした家族をも対象とした福利厚生の意識は広がり始めたばかりである。

そう考えれば「役所」で行われるこの「ピクニック」が「家族」をともに連れて行く行事であることの意味がはっきりするだろう。野村は「係長」なので本来は峯山課長と同じ管理職側

であるが、こうした「金」の意味を理解していないので頑なにその出費を拒否する。だが、野村の意識以上に、そもそも周囲は野村に何も期待していないのである。

峯山の羨しいな、には皮肉がこもっていることは、彼の口のすべりが、酒をおおていいよいよよくなりだしたことでも分る。私は峯山が自分にかこつけて、私を笑っていることが、身にしてみて分つたので、もうそろそろ帰宅してもよからうとも考え、金を払おうと、財布を出しながら腰をあげた。

(270)

それにしても、野村は何故ここまで他者を信用しないのだろうか。なぜ認知の歪みがひどいのか。物語が野村の視点で進むため、特殊な人間の視点によって眺められた世界が描かれているようにすら思える。だが、これまで見てきたように、野村によって描かれた会社／家庭というトポスは、戦後社会の日常であつたようにも思える。こうした孤高とも言つてよいような視線は、家族を扱った小島の初期小説にはしばしば見られるもので、これがユーモラスな雰囲気の原因になっているとも言える。のちの「馬」や「アメリカンスクール」などに繋がっている。

5 性的なトポス あるいは 私的なトポス

峯山の「接待」をおえた野村は、そのまま自宅には帰ろう

とせず、駅から反対側に歩き「秋野」という常連の店に寄る。

私はそのおかしな文面を読みあげながら、最後までくると、峯山とまちがえてギョツとして、昼間のあの書類の一件を思い出してしまった。峯山はけつきよく自分をどう扱おうとしているのだろうか。この女は私のそばにいて、ただ酒をやたらにつぎ、私も酔うと膝をくっつけてくるだけの能だけしかない。そう考えていると、女はおおるように私の酒を自分で飲んでまたかつてに酒を頼み、彼女は二百円の万年筆一本をホウビにもらったといった。

(273)

以後物語は、四つのトポスで進行する。「秋野」は「出版社」「役所」の次の三つ目のそれにあたるが、「出版社」「役所」が公的な労働空間であるのだとすると、「秋野」は私的かつ性的な空間として描かれている。店の嬢であるルミ子に高額なブラウスを買わされながらも、性交渉に失敗するというエピソードは、このトポスが性的空間であることを象徴しているが、同時にこの空間は常に酔いとともに語られるカーニバル的なそれである。

翌朝の「自宅」は二日酔いの視点で描かれる。この「自宅」こそが四つ目のトポスであるが、「自宅」に居る息子達の存在は、実は家族とは隠された性的空間であることを暗示している。「家族」というトポスを維持するためには、「役所」の収入では足りず、労働の場は「役所」と「出版社」にスピリットされる。

一方で「労働」と「家族」のストレスは、プライベートなトポスを「自宅」と「秋野」とにスピリットしている。

「自宅」から見れば「秋野」は同じ私的・性的空間でありながらも、家族制度（ロマンチックラブイデオロギー）としては忌避される場である。私的・性的空間から見れば、「役所」も「出版社」も公的・労働空間であるが、本来「出版社」は「役所」が禁止している「内職」の元凶である。本来一つであるべき空間をスピリットすることなく労働することが出来る南には様々な「書類」が集まるが、労働空間を二つに分けてしまうのも「校正」されるべき書類である。一方の私的・性的空間でも一つの店で働き続ける嬢には「表彰状」という書類が与えられ、その嬢との遊興に溺れていた野村には、裁判所からの「通告書」が届く。四つのトポスは様々なシニフィアンによって結びつけられながらも切斷されている。

吉本が書いていると、飲屋「秋野」の女が語った、あの外で顔を洗う男というもののモデルは、自分だとばかり思っていたが、それでは、この男にちがいはあるまい。この男はきっとここへ私のように出かけてきているのだ。(286)

吉本が書いた小説を「秋野」の女が読み、その話を聞いた野村が、小説と同じ動作をする坂井老人と出会い、小説の登場人物を通じ、野村と坂井は重なつてゆく。ここでも、浮遊するシニフィアンが同一性を発生させている。

公園という空間は、夜と昼の間、朝にのみ存在するトボスである。ここで犬を散歩し公園で洗顔して帰宅することで野村は家族というトボスに参入できると考えている。その意味で「公園」は両義的かつ中間的なトボスであると言つてよい。野村と坂井を、このトボスで出会させたのは「犬」であつたが、坂井老人はかつて飼つていた犬について意味深な台詞を述べる。

「あなたの犬はどうされたのです」

「犬は知人にくれてやつた。家庭裁判所に出ている男なんだ」老人の顔は昨日とはうって變つたように、つややかに若々しく見えた。

まるで会社では、故意に擬態を見せていたのではないかと疑われた。(288)

意味を通すことを優先すれば、係争中の妻側の人間に「犬」をとられてしまったという意味だろうか。いずれにせよ、この「家庭裁判所」というシニフィエが、野村を次のトボスへ誘う。

6 言葉の世界

裁判所からの「通告書」を野村は眺める。

それはどういうわけか私にもよく分らなかつた。印刷した文字の中に適当な、何字分かの間があけてあつて私の妻

の名と私の名が少し離れてペン書きで書きこんであつた。私は習慣上、その間が何字分あけてあるのか、受け取つた直後、数えてみると、活字にして八字分である。これではまだ足りない。係りの者は筆記体と活字体の字の大きさの関係をまるで心得ていないものと見える。ズサンなものだ。野村みち子という妻の名前の方は、私のより、いっそうキュウクツそうに見えた。これでは足りない。私や妻よりもっと長い名前だつてあるじゃないか。これは何とかしなくちゃならない。それに誤字が、誤字というより、活字が旧体のと新体のとまじつてゐるし、第一平仮名はこれも活字の型が統一されていない。私に校正させたら、忽ち真赤にしてしまうことだつてできるのだ。みち子じゃなくてミチ子なんだ。それから私は、その文章にどこか欠点はないか、語法上の誤りはないかしらべてみて、一箇所、「が」とすべきところが、「は」になつてゐるのを見つけたしてそれは赤鉛筆で訂正した。(289)

ここで、野村の中で「通告書」は「校正」と重なる。校正は、なるべく意味を排除した方が効率は上がる。だが、それは本質的な仕事としては完遂しない。野村の校正がわずかな枚数であるのにも関わらず終わらないのは、その向こう側のシニフィエを確定させないからである。

シニフィエなきシニフィアンが浮遊し続けるのは、シニフィエによって繫留されていないからであるとも言えるが、一方で

はシニフィエとはシーニュとなった結果に過ぎないとも言える。ただ、小島の小説では、多くの場合シニフィアンは自由に動き、多重化されたシニフィエを生み出す。さきに論じた視点となる主体が不安定な理由も恐らくそこにある。通常／酩酊、論理的／感情的、公的／私的といった二項対立は、浮遊するシニフィアンにとって容易にシニフィエを反転させてしまう。野村にとって―以後の多くの小島の小説にとって―通常／酩酊という対立や統一された主体という概念は、ほぼ意味のないものになっている。

シニフィエなきシニフィアンと化した「通告書」も、ただ野村を裁判所に誘う。また、以前に目撃した（と野村が信じている）南と妻・ミチ子との関係が、自らの裁判の勝利を確信させていることが、「出頭」と呼ぶ行為を後押ししていることも興味深い。なぜならば、朝の犬の散歩から帰宅した際に想起した記憶から丸括弧の表現で（尻尾をつかんでいるんだぞ）と表現されているからである。

帰宅後、子供たちから朝食に呼ばれなかったという「トラブル」から出庁が遅れてしまう。

私はそう思いながらも、この家で一番時間を急ぐのは私であるということは、どうしても疑う余地がないので、これは私を呼んだのだけれども、ラジオの音でききとることが出来なかったのだらうと思いかえした。それはあり得ることだ。それに私が腹を立てているから台所にあらわれな

い、と思われていないともかぎらない。

(291)

呼ばれないという「事実」の理由を考えていたのが、いつの間にか「事実」そのものの判断を訂正したり、理由そのものを想定とは違うものとすり替える。出来事↓感情↓原因追及というプロセスの中で、そのプロセスのどこかを脱臼させることで妙な納得に至るのが野村の思考の特徴なのだ。それも、その判断様式は、食事関係の時に顕著に表れる。この後によくありついた朝食も、急いで食べなくてはならず、さらには味噌汁の具が全くないという憂き目にもあう。だが、その際にも（自分が思いちがいをしたのだ。それにすぎない）と自らの感情の根拠をいとも簡単に訂正してしまう。

そう考えると職場で繰り返される「天井」の話も容易に理解できるだろう。「天井」の未着は、「天井」を注文したという「事実」から発生するが、そもそも注文していなかったら、未着であるという事実もなかったことになる。デリダ⇨東浩紀が言うように、「手紙」の「遅延」は永遠の未着かもしれないが、投函したという事実への信頼ときっと届くだろうという期待によってしか成り立たないものであるからだ。

父親としての威厳や居場所を失っているから家の本棚が「占領」されているのではない。父親としての尊敬が失われたから吉本のサインが要求されているのではない。父の本（言葉）や文字（名前⇨サイン）がなくなっている事実が、野村の家族との状況を的確に語っているのだ。

だが、それらは永遠に「遅延」する「手紙」としての言葉である。そして、その遅延は野村本人が生み出し続けている。吉本の言葉（サイン）は永遠に娘には届かない。

この事情は役所においても変わらない。状況を把握するために常に早い時間に出庁し観察者の位置であろうとするが、観察した出来事は常に観察者の中で「解釈」され直されるだけである。南は、場の中心となり状況を生み出しながらも野村の「解釈」をいとも簡単にすり抜けてゆく。南にとっては常にそこにあり、次々とこなしてゆくものである「書類」＝「仕事」だが、野村にとつてそれは永遠に辿り着かない、次にいつ来るかもわからない「校正」である。野村は現状を観察し受け入れることしか出来ないが、南は新しい状況を生み出す源泉である。南は、役所の仕事とプライベート（家族）の狭間に「ピクニック」という言葉（状況）を生み出す。常に反転する写像関係ではない野村のトポスにおいて、「ピクニック」とは、まさに了解不可能な事態である。

7 裁判

この後、妻と義母の幻影に導かれて野村は裁判所に出頭することになる。裁判の場面は、タイトルでもあるので重要に思えるのだが、その量は全十三章の一章分にも満たない。

そう思っておられるようですね、あなたは。しかし、そ

れはウマすぎる話じゃないですかね。養家の家に住んで、その中で別居しておると称して、生活不能者でもないくせに扶養義務を怠る、というんですから、誰がみたって、あなたが悪いですよ。私の方としては、何か、ワケがあると思うんですが、あなたみたいに片端から、かくしておられるとなると、最初から申し上げているように御相談申し上げることが出来なくなってしまうんです。

(321)

養家の家に住んでおいて「別居」だと言う。野村の発言には何の論理的・一貫性もない。だが、この裁判では「事実」確定に關して争っている点はない。あくまでも、家にお金を入れないなどという事実対しての双方の「理由」を尋ねているだけで、そこから罪や勝敗を確定しようとしているわけでもない。このことを、担当者は繰り返し説明しているが、野村には通じない。家事審判や家事調停を扱う家庭裁判所が、戦後GHQの示唆によって設けられた。当初から「独立的性格」や「教育的性格」を提唱していた家裁では調停という性質が強い。特に家族の問題の調停は、ロマンチック・ラブ・イデオロギーを前提とした恋愛結婚家庭の増加に伴って戦後激増していた。公的労働／私的家族という制度がもたらす問題は、戦後の経済復興において最も重大な問題であったのだ。

日本の戦後社会の労働空間、すなわち公的なトポスはホモソーシャルな世界である。だが、ホモソーシャルとは、そもそも男性の有益性のために設計された社会であるのだから、その

反転としての戦後家族のもたらす不況和音とは、こうした公的空間の影である。野村だけではない。五島、吉本、峯山、坂井といった主要な人物たち全てが家庭の問題を抱えている。公的空間では経済的、社会的な優劣が生じているのだとしても、それらは、様々な「言葉」と「解釈」によって結びつけられ、あり得たかもしれない（反転）可能性として描かれ、一方で南や役所の守衛そしてもちろん独身である三上らは「解釈」不可能性の彼岸の位置にあり続ける。

この反転可能性は、同窓生であることと「言葉」に関わる「仕事」によって成立している。しかし、吉本は観察した生活を「書く」ことが出来る位置にあるが、野村はただ観察されるだけの存在である。病的にくり返される野村の「笑い」に対する警戒の念は、最初からそこにある風景の一部と化したいという対処療法に頼る他はない。だが、真の「風景」ならば「観察」することもないのだ。

8 再びカーニバル空間へ

物語は、最後に野村たちを「秋野」に集結させ、野村のみを私的空間の「家」に追い出す。二つの空間は共にカーニバルの様相を示す。店の奥で飲んでいる峯山と三上。二人の関係は、野村の「仕事」の上で重要なものであるが、一方で決して混ざり合うことが出来る関係性ではない。酩酊した二人に付いてキャバレーに移動したものの自分の席がなく帰路につく野村。

野村は、そこでやはり酩酊した五島と坂井に会うが、二人が野村の存在に気がつくことはない。

この夜の出来事には恐らく二つの意味がある。一つは、野村があらゆる公的・私的空間においても孤立した存在であること。もう一つは、野村の（他の多くの男達も）プライベートは、常に酩酊のもとにあるということだ。

だが物語は、野村が酔いながらも常に移動する主体（フラヌール）でなければならないことを、特別な事態として描いているわけではないだろう。居場所が見いだせないからこそ、常に酔い歩かなくてはいけない。常に受け入れられない現実があるからこそ、そこにどんなシニフィエも見いだすことが出来ない。だからこそ、浮遊しつづける……。だが、その野村に「観察」される人々も、本質的には同様なのである。フラヌールがフラヌールを見つめ合う世界には、彼岸の真理など存在し得ない。

「いよいよ、これから目的の××海岸へ向って進みますが、おくれた時間は、十分スピードをあげてとりかえしてもらえそうですから、安心して下さい。それからこの車のことについて一言御報告しておきます。これは、峯山さんの関係で、『鷗出版社』の三上さんの御尽力によって、M新聞社の宣伝カーを出してもらうことが出来たのです。皆さんにかわってあつく感謝いたします。M新聞社はモチロン『鷗出版社』については、みなさんが先刻御承知のところですから、省略させていただきます。この方が三上さ

んです。

(375)

スピリットされていた公的空間が一つなった。そこには、前夜カーニバル的空間を共にした野村の子供たちもいる。しかし、むろん私的空間が融合したわけではない。母や義母、そしてもう一つの性的空間は排除されたトボスがそこにある。だが、本当に「秋野」は消え失せてしまったのだろうか。バスが向かう海とは、影のない光だけのトボスであるのか。最後の峯山と坂本との会話ではこんな放言がなされている。

「坂本くん」峯山が女事務員の名を呼んだ。「きみなんか、
どういう男をえらぶ？ ええ？ 僕がちよいとばかり、お
説教をいたしますとね」

「あら、みずからをかえりみて、なの」

「正にそうだよ、この、男ってやつはね。どうも僕はこ
うハッキリしなくちゃいけないえ、と思うんだ。いいかね。
ずるずるべつたりね、しているとだね、たとえば、おれ
がきみにだね、たとえば、ハンド・バックを買ってやるこ
うだね。ところがそれがそうするつもりもなくっていつて
いたら、どうなる。実際買ってやらない、そうするとつま
り次からは信用しなくなるじゃないか。その男をだよ。そ
んなら最初からそういつておれば、少くともがっかりする
ことはないやね。がっかりしつづけると、女はどうも、持
前のおシャベリを発揮して吹聴してまわることだってした

くなる、とこうなんだ。いいかね、坂本くん、これはハン
ドバックのことだけだと思つちゃ……ウソだと思つたら、
きいてみたまえ、ねえ野村くん」

(379)

本意かどうかは別として坂本はバスのホモソーシャル空間の
中で自らがどうふるまうべきかを心得ている。峯山のこの戯言
には、物語全体への妙な暗示が含まれている。

「男をえらぶ？」という質問が結婚相手をさすのだとすれば、
ここでの結婚には経済的契約が含まれてこまれている。契約は言葉
によつてなされるわけだから、最初から出来ない約束をしなけ
ればいいわけだが、経済的確約をしてくれない男を女は選択し
ないし、約束が破棄されれば言葉によつてこれを批難する。こ
うしたことを女の「属性」と見なして峯山は「説教」している
わけだ。

ここで話の例に「ハンドバック」という言葉が混じっている
点に注目しなければならぬ。これを野村に振っている峯山の
意図は明らかである。ルミ子との一件を示唆しているわけだ。
それも、子供たちの目の前で……。

だが、「約束」とは、その結果としての「結婚」とは、告白
や婚姻届などパフォーマティブな言語行為によつて成立する事
項である。守れるから「約束」するのではない。「約束」した
から、守らなくてはならない義務や、守れないという違反が発
生するのである。むろん、だからといって、「約束」しなければ
「家庭」が手に入らないのであれば、「約束」しないことは

何の対処にもならない。峯山は自らをもがんじがらめにしている桎梏に無自覚なのである。だが、それはおそらくこのバスツアーに参加し楽しんでいる人間全部が同じ桎梏の中に閉じ込められている。自由恋愛から家族に至る戦後社会の新しい人生サイクルは、「海」をも本質的な「外部」にはし得ない。そこは、日常の「ケ／ハレ」の循環の一部にすぎない、今日だけの「目的地」である。

以後の小島の仕事にとって、「家族」とはどこに到達するか分からない物語であり、常に現在進行形の当事者としての物語である。事後的に語ることが出来ることは出来事のみであり、その出来事の意味さえも曖昧なまま現実が続いてゆく。晩年に至るまで常にそういう位置で小説は終わる。小島の家族小説においては、明晰に語ることが出来る主体などは存在しない。そしてそれは、もちろん小島独自の問題などではない。家族がどう生きてゆくのか。それは、戦後の恋愛結婚世代において本質的かつ普遍的な問題であったのだ。

本文の引用は『小島信夫長篇集成①』水声社、二一〇五年一月に依っている。引用部の末尾（ ）の数字は、引用ページに相当する。